特集
途上国とコイン

韓国のコイン
―長い歴史のなかの新参者―

奥田 聡

李氏朝鮮の銅銭「常平通宝」
発行開始 1633 年、通用停止 1904 年
（韓国貨幣博物館 HP）

●トンジョンという呼び名

韓国ではコインのことを指すとき、改まった形としてはチュファ（鋳貨）、より砕けた形ではチャンドン（小銭）、あるいはトンジョンと呼ぶ。チャンドンがどちらかというとその通用価値に注目しているに比べ、トンジョンは通貨の形態に注目した語感があり、日本語で通常用いられる「コイン」の語に近い。このトンジョンとは漢字では「銅銭」である。銅以外の素材のコインもすべて韓国語ではトンジョンと総称される。

この「銅銭」の語は李朝時代の幣制にさかのぼる。当時東アジアでは、中国秦朝以来の方孔銭（円形角孔の銅貨）が使われていた。中国では五銖銭や開元通宝、永楽通宝などが有名で、日本では銭形平次が投げる寛永通宝が有名であるが、韓国で知名度ダントツの方孔銭は一六三三年以来二七〇年余の長きにわたり使用された葉銭、つまり常平通宝である（写真）。韓国で銅銭とは元来この銭のことを指したが、現在では転じて金属通貨全般のことを指すようになっているというわけだ。

●李朝期の本位通貨だった銅銭

日本でも過去のコインに関する事柄が現代語のなかにいくつか痕跡として残されている。「猫に小判」だとか「三文判」などがそれだ。しかし、韓国ではコインそのものの名称として使われている。それほどまでにかつての朝鮮では銅銭の影響力は大きかった。一九世紀末から二〇世紀初頭の開港期になっても、日常取引から家畜・不動産取引、納税などあらゆる取引の支払いは銅銭現物によることを原則としていた。公私一切の取引に無制限に通用する銅銭はまさに本位通貨と呼ぶにふさわしかった。一方で、こうした状況に驚く外国人の記録も残されている。一八九四年冬に当時の朝鮮を旅行したイギリス人女流作家のイザベラ・バードが内陸部への旅行に際し、日本円で一〇〇円相当の銅銭を運搬するのに男六人もしくは馬一頭が必要で、あまりの物量の多さにこれらの銅銭を旅行に使う船のバラストとして活用したほどだったという。

●日本が完成させた近代幣制

開港期の朝鮮・旧韓国（大韓帝国）では、通貨流通を巡る状況は混乱を極めていた。開港場周辺では円などの外国通貨が通用したほか、首都漢城（ソウル）を中心とする西部地域一帯には一八九二年に製造が開始された西洋式の白銅貨が流通し、一七世紀より製造されてきた銅銭も依然全土で流通していた。一八九八年、突如当時の韓国政府が額面の二割程度の費用で製造できる白銅貨を本位銀貨に代えて乱発したうえ、統治の緩みに乗じた粗悪な私鋳貨の横行が目に余る状況となり、白銅貨の価値は下落の一途をたどった。また、銅銭は素材価値が比較的高く全土で通用したが、東洋の方孔銭の常で銅品位や量目にばらつきが大きく、また、上述のように流通に大きな不便をともなった。

こうした混乱した通貨流通の状況に終止符を打ったのが、第一次日韓協約に沿って断行された一九〇五年の貨幣整理事業であった。韓国側の造幣局（典圜局）閉鎖、日本のコインの無制限流通、それと同一規格の韓国コインの大阪造幣局への発注などを内容とし、植民地幣制構築への布石ともいえた。一方、それまで通貨流通の障害要因となってきた白銅貨と銅銭の回収が同年から四年間にわたって続けられた。こうして近代的な

西洋式コインが韓国全域に行きわたるようになった。一九一〇年の日韓併合にともない、コインについては日本本土のものが持ち込まれそのまま流通するに至った。しかし、回収が終わったはずの前述の銅銭「常平通宝」は、大正末期になっても民衆の間で相対通用がなされていたという（朝鮮総督府元財務局長・水田直昌氏の証言）。近代的コインが行きわたったはずの日本統治期にも旧銅銭が根強い人気を持ち、旧銅銭を「お宝」と考える記憶が大韓民国建国以後にも民衆の間に保持されていたことは想像に難くない。

●インフレ高進を警戒した幣制構築と「重たいポケット」の不評

一九四五年の解放後、インフレに悩まされ続けた韓国ではコイン不在の時代が続いた。一九六二年に朴正熙が始めた経済開発政策はその後の韓国経済の進路を決定づける意義深いものであったが、供給力不足による途上国型インフレはなおも続いた。本格的なコイン発行は一九六六年になってようやく開始された（黄銅製一、五、一〇ウォンの三種）。このうち、同年銘の一〇ウォン貨は現在流通市場で見出だせる最古参のものだ。その後のコイン発行においては、サイズや量目などを当初発行時のまま極力維持されている。歴代政権は紙幣を含む通貨の形状縮小が当局によるインフレ追認の意味に取られ、それがさらにインフレ心理を刺激することを恐れた節がある。特に、朴正熙政権および後続の軍事政権は開発独裁的色彩が強く、その正統性は経済発展政策の成功に負うところが大きかった。インフレの放置、つまり経済発展政策の失敗を想起させるような措置は取り難く、コインの形状変更は敬遠されてきたようだ。この間のコインにまつわる措置等は専ら銘価一〇ウォン以下の小額貨に関するものに限られる。

現在の韓国で、流通市場で常見するコインは五〇〇、一〇〇、五〇、一〇ウォンの四種類で、五〇〇、一〇〇、五〇ウォン貨はそれぞれ一九八二、七〇、七二年に発行が開始された。一〇〇、五〇ウォン貨について途中にマイナーな図案修正が行われたことを除くと、形状、量目などは現在まで不変である。一〇〇ウォン貨の発行が開始された一九七〇年から二〇一二年までの四二年間で物価は約二〇倍上昇したが、コインは同じものを使っている。インフレを生き抜いてきたコインたちも、気の毒なことに「ポケットが重くなる」「財布が膨らんでしまう」などと意外に不評だ。

●クレジットカードの普及とコイン退蔵の加速

一九九七／九八年のアジア通貨危機の時には大量の失業者が発生し、多くの家計が危機に瀕した。こうしたときには普段は退蔵されているコインも家計の一助となって日の目をみることが多い。アジア通貨危機の余燼（よじん）のさめやらぬ時期に赴任した筆者も、五〇ウォン貨最古参の一九七二年銘完未品※などのお宝を多数流通中から拾い上げている。しかし、その後の順調な経済成長で家計の状況が一服すると、コインはその取扱いの面倒さや使いでのなさから退蔵されるようになる。コイン退蔵に拍車をかけたのがクレジットカードや交通カードの普及、そして公衆電話の衰退と対になる携帯電話の普及である。スーパーなどの買い物の現場ではクレジットカードの利用が相当普及してきたが、現金もまだ多く使われている。しかし、客が払う現金はほとんどの場合紙幣のみで、端数までコインを併用してきっちり払う人は多くない。スーパーは依然としてコインの大きな需要先だが、客が受け取ったコインはその先の行き場を失ったのだ。コインの退蔵に最も頭を痛めているのは韓国銀行だ。造幣費用削減のため同行は二〇〇八年から毎年五月に「汎国民コイン交換運動」なるものを展開するなど、退蔵されたコインの回収に躍起になっている。二〇一二年の同運動の回収成果は約四〇〇億ウォン。筆者の一九九〇年代中盤における推計では、発行残高のうち日常取引で活発に動いている部分（活動残高）に対する退蔵率は年約五％で、これによれば韓国の年間コイン退蔵額は約五〇〇億ウォン程度。つまり、同運動により年間退蔵額に匹敵する額が日の目をみたことになる。でも、一般の韓国人にとって韓国銀行というのは雲の上の存在で、そこからの一声でこれだけの量が集まるということはおそらくかつての退蔵率を上回るペースで蓄積された膨大な退蔵ストックが背後に存在しているという気がしている。現地に赴いたら今度は改めて退蔵率推計をしてみたい。その日を楽しみにしている。

（おくだ　さとる／細亜大学アジア研究所教授）

※ 1972 年製造の完全未使用品のこと。